

奨励研究助成実施報告書

助成実施年度	2022 年度
研究課題（タイトル）	日本における「セセッション」の伝搬過程について－洪洋社刊『セセッション図案集』及び『様式図解』に着目して
研究者名※	藤原 美菜子
所属組織※	神戸大学大学院 工学研究科 中江研究室
研究種別	奨励研究
研究分野	その他
助成金額	80 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（ ）は、報告書提出時所属先。

大林財団 2022 年度奨励研究助成実施報告書

所属機関名 神戸大学
申請者氏名 藤原美菜子

研究課題	日本における「セセッション」の伝搬過程について—洪洋社刊『セセッション図案集』及び『様式図解』に着目して
(概要) ※最大 10 行まで 本研究は、大正・昭和戦前期の代表的な建築専門出版社である洪洋社が大正初期に創刊したとされる『世界建築 様式図解』（初版 1912 年）（以下、『様式図解』と表記）及び『セセッション図案集』（初版 1914 年）を対象としたものである。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのドイツ・オーストリアに興った革新的芸術運動である「セセッション(Secession)」は、日本には、明治末期から大正初期において広く流行したことで知られている。上記 2 つの書籍は、当時の日本における「セセッション」の注目の高まりを示すものであり、本研究では、これらの書誌情報の分析や掲載図版の同定を行うことにより、当時どのような西洋建築作品が「セセッション」作品として、写真・画像を通して日本に紹介されたか、「セセッション」導入期の視覚的理解に着目する。また、それらの作品が現地でどのような建築様式と評されているかを分析することで、「セセッション」という語が示す建築形態の現地と日本との相違を捉えることを試みる。	

1. 研究の目的	(注) 必要なページ数をご使用ください。
概要に示した『様式図解』及び『セセッション図案集』は、それぞれ大正初期に出版された建築図集である。同時代は、国内の種々の建築誌が写真掲載を活発化させた最初期に当たり、建築情報の伝搬における画期として重要な時期である。洪洋社の初期出版物について述べた菊池重郎氏は、『様式図解』について、「当時わが国に「セセッション」」の関心が高まっていた一つの証左である」、「一出版社洪洋社の微々たる小プレート集であったにしても、日本に導入紹介されたものとして軽視できないように思われる」と、日本に「セセッション」を導入した重要な出版物の一つとして同書を評価している¹。また、洪洋社の出版活動全体を明らかにした川嶋勝氏は、『セセッション図案集』について「当時の「セセッション式」のブームに乗って一定の売り上げが立っていたと推測される。」と、洪洋社の経営における「セセッション」関連出版物の重要性を述べている²。このような評価にもかかわらず、これらの書籍の現存が長く未確認で研究そのものが不能な状況にあった。申請者はこれらの現物を複数見出し、分析を進めてきた。これらの書籍は欧米の建築関連出版物から写真やドローイングなど複製することにより「セセッション」を紹介した最初期の建築図集であり、当時の日本における「セセッション」の流行に影響を与えた書籍といえる。 「セセッション」が明治末から大正初期の日本にかけて流行を博した当時、言葉としての「セセッション」がどのように説明され、どのような概念として理解されていたかについての研究は多く見られる。それに対し、本来、建築様式の伝搬は形態面の影響が大きいはずであるが、実際に	

どのような西洋建築作品が「セセッション」作品として、写真・画像を通して日本に紹介されたか、つまり日本における視覚的理解について当時の文献を用いた分析はほとんど見られない。これより本研究では、当時日本に流通したとみられるドイツ語圏の雑誌を用い、研究対象である(1)2つの書籍の掲載図版の同定を行う。その同定結果から、洪洋社が「セセッション」を紹介するにあたりどのような西欧建築作品を「セセッション」と認識し、紹介したかを分析・考察することが本研究の目的である。同定作業にあたっては、国内で確認できる書籍については閲覧し、閲覧困難な書籍については、主に「セセッション」運動の中心地であるドイツ・オーストリアの国立図書館、大学図書館を訪れ、当時刊行された雑誌・書籍を確認する。

明治中期以降、日本に「セセッション」が導入されると、「セセッション式」とされる建築が国内に登場し始める。そうして国内に建てられた「セセッション」建築のうち複数は、今もなお現存する。ただしこれらの建築は、「セセッション」運動の中心地となったオーストリアに現存する「セセッション」の作品とは大きく様相が異なる。この点に着目し、①本拠地であるドイツ語圏において「セセッション」と称される建築物、②研究対象である2つの書籍に「セセッション」作品として掲載・紹介された建築物、③日本において「セセッション」建築と評される建築物、の比較調査・分析を行い、(2)「セセッション」という語が示す建築形態の現地と日本との相違を捉えることを試みる。

2. 研究の経過

(注) 必要なページ数をご使用ください。

申請時には『セセッション図案集』と『様式図解』「セセッション」集のみを扱う予定であったが、新たに、『様式図解』全24集の掲載図版を同定することで、出版社である洪洋社の建築様式の認識についての分析を行う運びとなった。そのため、対象図版数は大幅に増えた。

まず1.で示した2つの目的((1)及び(2))の研究経過をそれぞれ記載し、(3)として新たに研究課題となった『様式図解』全体の分析調査の経過についても記載する。

(1)『様式図解』及び『セセッション図案集』の同定作業

2023年月上旬は、日本で閲覧できる当時のドイツ語圏の雑誌・図書を確認し、同定作業を行なった。また、閲覧できない雑誌・図書についてその書籍名と所蔵図書館を把握・リスト化した。その上で、8月以降にドイツ・オーストリアに渡航し、現地の図書館での閲覧作業を行なった。具体的にはベルリン州立図書館、ベルリン芸術図書館、ミュンヘン工科大学図書館、ウィーン大学図書館、ウィーン工科大学図書館、アウグスブルク図書館等を訪問した。同定結果の整理により、洪洋社の「セセッション」の認識についての分析・考察を行なった。

(2)ドイツ・オーストリアと日本の「セセッション」認識の比較分析

同定作業の結果、引用元が特定された掲載作品について、その建設年、所在地、設計者などを把握・整理し、引用元である掲載雑誌記事での評価のされ方について分析を行った。また、ウィーンに現存する、ウィーン・セセッションのメンバーであったヨゼフ・ホフマン、ヨゼフ・マリア・オルブリッヒ、オットー・ワグナーといった建築家による建築物と、『様式図解』『セセッション図案集』に掲載されたもののうち、複数の現存する建築物の現地調査を行い、意匠面等の比較を行った。セセッション関連の展示・紹介を行っていたレオポルド美術館やウィーン博物館などを訪れ、カタログ等の資料を入手した。

(3)『様式図解』全体の分析調査

国内図書館横断検索や古書サイトなどを用い、『様式図解』の現物資料収集を行った。後述するように、『セセッション図案集』の現物資料収集も行った。入手した現物資料の詳細な分析を通して、菊池の先行研究に対し、同書の基本的な書誌情報の確認及び更新作業を行った。シリーズ集である『様式図解』に対し、各集の掲載図版の同定作業を行った。「セセッション」集では複数の雑誌からの複製がほとんどである(後述、表 2)のに対し、ほかのタイトル集では単行本からの複製も多く見られる。オンライン上で確認できない書籍については上述の図書館へ訪れ、閲覧・同定作業を行った。掲載作品の分析により、洪洋社の様式理解について調査・分析した。

3. 研究の成果

(注) 必要なページ数をご使用ください。

①『様式図解』の書誌情報及び同定作業について

(日本建築学会技術報告集 2024 年 2 月号掲載 「洪洋社刊『世界建築 様式図解』に関する基礎的研究 その 1：書誌情報について」)

本稿は、申請者が新たに見出した『様式図解』の現物資料と、同書の広告 2 件を対象とし、菊池重郎の先行研究において言及されている同書の書誌情報の確認・更新作業を行なったものである。先行研究では、菊池のみが『様式図解』が「全 24 集」のプレート集であるとし、大半の集のタイトルを記している。ただし、第 16、20、21、22、24 集のタイトルは記しておらず、根拠資料も示していない。本稿では、筆者が行なった新規資料の分析により、24 集の各タイトルの確認・更新作業を行った。資料の不足により、計 5 集のタイトルは未確認となった。さらに、一部資料のプレートのキャプションに「様式図解 25」と記載があることが確認されたことにより、『様式図解』は少なくとも計 25 集が刊行されたことが新たに明らかとなった。第 26 集以降の刊行は未だ不明である。さらに本稿では、同書の刊行時期の推定、印刷方法、頒布方法の確認を行っており、本稿をもって、これまで菊池以降論じられてこなかった『様式図解』の全体像が把握された。また、入手した 6 件の『様式図解』の各現物資料で確認されたプレートをリスト化することで、掲載図版のキャプション等の情報が得られ、これらにより、さまざまな海外建築様式が写真やドローイングを通して日本に紹介されたことが確認された。洪洋社は鮮明な画像のコロタイプ印刷を特徴としており、多数の、特色ある集が組まれた『様式図解』を「一出版社の微々たる小プレート集であったにしても、日本に西洋建築様式を導入紹介されたものとして軽視できないように思われる」と菊池が評価したことは極めて妥当であったことが理解される。

本稿掲載後の資料収集の結果、日本国内において『様式図解』の現物資料を新たに発見し、研究対象である『様式図解』の現物資料は 6 件だったものが 8 件に増えた。その結果、前述の論文表 5 に対し、不明であった第 20、22 集のタイトルを含む全 25 集のタイトルが全て確認・更新され、各集の掲載図版(10 枚前後/集×全 25 集=全 250 枚)も特定された。図版が掲載されたプレート(以下、図版プレートとする)には複数作品が掲載されている場合もあり、全 250 枚には計 270 作品が掲載されている。これらの同定作業結果、233 作品の引用元である建築関連の洋書が特定された。洪洋社が各タイトルの作品を紹介した目的や、どのような作品抽出であったのか、洪洋社の各様式の認識・理解と、当時の日本の建築界における様式理解といった調査・分析については後述のように、今後の課題としている。

『セセッション図案集 外観之部』については、研究助成期間に新たに 12 冊の現物資料を入手

した。合計 22 冊の「外観之部」資料の詳細な調査・分析により、日本で流行を博していた「セセッション」を写真や図案によっていち早く紹介した同書の書誌情報全体が明らかとなった。本研究成果は、日本建築学会近畿支部にて発表した。（令和 6 年度日本建築学会近畿支部研究発表会梗概 pp. 337-340 「『セセッション図案集 外観之部』の基本的書誌情報について 『セセッション図案集』に関する研究—その 4—」）

表 1 『様式図解』全 25 集のタイトルと同定済み作品数

	タイトル	同定作品数		タイトル	同定作品数
第 1 集	モーダン・レネッサンス	10/10	第 13 集	セセッション	10/10
第 2 集	セセッション	7/13	第 14 集	モーダン・レネッサンス	10/10
第 3 集	英国レネッサンス式—アダム派	12/12	第 15 集	サラセン建築	10/10
第 4 集	仏国初期レネッサンス（十五、十六世紀レネッサンス及フランボ—ヤン式	0/10	第 16 集	モーダン・レネッサンス	12/12
			第 17 集	サラセン建築	10/10
			第 18 集	セセッション	12/12
			第 19 集	スーボー	10/10
第 5 集	モーダン・レネッサンス	9/9	第 20 集	セセッション	12/12
第 6 集	ジャーマン・コテージ	11/11	第 21 集	セセッション	0/10
第 7 集	モーダン・レネッサンス	10/10	第 22 集	木造建築のスタイル	10/10
第 8 集	モーダン・レネッサンス	10/10	第 23 集	セセッション	10/11
第 9 集	セセッション	10/10	第 24 集	バンガロー建築	1/10
第 10 集	モーダン・レネッサンス	10/10	第 25 集	木造建築のスタイル	10/10
第 11 集	露西亜建築	15/15	同定済み		233/270 作品
第 12 集	セセッション	12/13			

②『様式図解』『セセッション』集掲載作品の同定結果

表 2 『様式図解』『セセッション図案集』掲載作品のうち同定に用いた雑誌名と同定された作品数

	雑誌名	出版地	『様式図解』 「セセッション」集	『セセッション図案集』	
				「室内之部」	「外観之部」
①	Moderne Bauformen	ドイツ・シュトゥットガルト	21	36	25
②	Innendekoration	ドイツ・ダルムシュタット	15	11	5
③	Das Interieur	オーストリア・ウィーン	31	44	
④	Deutsche Kunst und Dekoration	ドイツ・ダルムシュタット	3		2
⑤	Die Kunst	ドイツ・ミュンヘン	2		
⑥	Die Architektur des XX. Jahrhunderts	ドイツ・ベルリン			44
⑦	Banken und andere Verwaltungsgebäude Zeitschrift für Bauwesen	ドイツ・ベルリン			17
⑧	Deutsche Bauzeitung	ドイツ・ベルリン			2
⑨	Die Baustile	ドイツ・ライプツィヒ			1
⑩	Berliner Architekturwelt Architektonische Rundschau	ドイツ・ダルムシュタット			9
⑪	The Studio yearbook of decorative art	イギリス・ロンドン	1		
同定結果（同定図版数／総図版点数）			73/91 点	91/166 点	105/107 点

①で述べたように、『様式図解』の現物資料が新たに増えたことにより、申請時には全 24 集中計 6 集の掲載作品 70 作品を同定対象としていたが、同定対象となる「セセッション」集の図版点数の合計は、70 点から 91 点に増加した。先行研究では、『様式図解』について言及した菊池重郎が、同書全 24 集のうち 2、9、12、13、18、23 集の計 6 集で「セセッション」が特集されたと述べているが、今回の新規資料の入手・分析により新たに 20、21 集においても「セセッション」が特集されていたことが明らかとなった。全 24 集のうちその 3 分の 1 である 8 集にわたって「セセッション」が特集された事実は、当時の「セセッション」の流行と需要の高まりを示唆するものであるといえる。「セセッション」の同定対象の増加と 2. で示したドイツ・オーストリアの大学図書館等での雑誌・単行本の閲覧及び同定作業の結果、同定された作品数は、73/91 点となり、同定が進んだ（表 2 太字斜体が更新部分）。新たに、イギリスの雑誌「The Studio yearbook of decorative art」からの引用が 1 作品確認された。表 2 の出版地列から分かるように、唯一のイギリスの雑誌からの引用である。これより、『様式図解』において計 8 集に渡って紹介された「セ

セッション」作品は6種類のドイツ、オーストリア及びイギリスの雑誌からの転載であることが明らかとなり、当時これらの雑誌を出版社である洪洋社が購入または借用していたことが推測される。

③『様式図解』同定結果にみる洪洋社の「セセッション」の認識・理解について

同定の結果、「セセッション」集として紹介された作品は、日本が主に導入したとされるウィーンにおける「ウィーン・セセッション」のメンバーの作品、あるいは本拠地であるウィーンの作品に留まらず、1900年代のドイツの住宅作品や、ヘルシンキ中央駅に代表されるフィンランドのモダニズムを築いたエリエル・サーリネンらによる図案、当時のドイツにおける設計競技作品など、1900、1910年代のヨーロッパ各所の最新建築作品であることが把握された。また、掲載作品の多くは室内の図案であり、全体的に直線的な傾向が強い意匠であることが共通する特徴である。また、著名ではない人物による作品も多く含まれる。つまり洪洋社は、所在地や設計者などにかかわらず、そして「ウィーン・セセッション」メンバーの是非に関わらず、近代ヨーロッパ各所の当時の最新作品で、直線的な傾向の強いものを「セセッション」として認識し、入手した洋雑誌から作品を抽出していたと考えられる。これは、ヨゼフ・ホフマンやオットー・ワグナーなどによる作品を「セセッション」建築としていた当時の日本の一般的な認識に対し、やや異なった認識・紹介の仕方であったと評価できる。また、実現された作品の写真のみならず、図1のような手書きの図案も多く掲載紹介されている点が特徴的である。さらなる分析については今後の課題である。

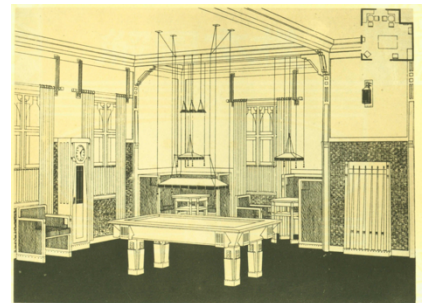


図1 『様式図解』「セセッション」集掲載作品例

4. 今後の課題

(注) 必要なページ数をご使用ください。

表1、2に示したように、研究助成期間中には、研究対象である2つ書籍の掲載図版について、全ての同定は完了しなかったため、引き続き国内外に所蔵されている1900年代刊行のドイツ語圏の雑誌や単行本などの閲覧作業を進めていきたい。

また、申請者の留学期間と研究助成期間の重複に伴い、以上で報告したとおり、研究助成期間においてはドイツ・オーストリアでの調査作業が主となった。そのため、(2) ドイツ・オーストリアと日本の「セセッション」認識の比較分析に対し、日本において「セセッション」建築と称される建築群の現地調査は行っていない。「セセッション」建築と評価された国内の建築群のリスト化を行い、調査を進めることを今後の課題としたい。国指定文化財等データベースでは、51件の建築物の全体あるいは一部分に対し、「セセッション式」や「セセッション的」といった表現で解説されていたり、石田潤一郎他による『近代建築ガイドブック』³など日本近代建築を解説した書籍において、複数の建築が「セセッション」建築と評価されていたりするなど、「セセッション」建築とされている建築は今もなお国内に点在している。今後はこれらの建築群を対象とし、建築物の基本情報(所在地、建設年、設計者)の整理、建築物に見られる装飾デザインなど詳細な意匠の調査分析を通して、明治末期から大正期の日本における「セセッション」の認識状況と、

実際の国内建築における表現方法について考察を進めていく。また、本研究助成期間中の海外調査結果と組み合わせ、「セセッション」という語が示す建築形態の現地と日本との相違を明らかにしていく。さらに、本研究対象である当時の出版物『様式図解』や『セセッション図案集』が、実際の建築にどう影響したか、相互の影響関係をなど考察することで、日本における「セセッション」の視覚的伝播過程を考察していく。

¹ 菊池重郎, 「出版社「洪洋社」の創立と大正初年の出版活動（下）, 明治村通信第 13 巻第 140 号, 1982 年, pp.1340-1344

² 川嶋勝, 『近代日本における建築出版活動の史的展開に関する研究—昭和戦前期までの建築出版組織の形成と建築図書の役割』, 日本大学大学院理工学研究科博士論文, 2018. 9, pp. 194, 195

³ 石田潤一郎ほか, 『近代建築ガイドブック』, 鹿島出版会, 1982-1985